

成田の戦後開拓と沖縄人移民

村 川 庸 子

1. はじめに

昭和20年11月9日に閣議決定された「緊急開拓事業実施要領」に基づき、日本国内各地で戦後の農業開拓事業が開始された¹⁾。その冒頭に方針として「終戦後の食糧事情及び復員に伴う新農村建設の要請に即応し、大規模な開墾、干拓及び土地改良事業を実施し、以て食糧の自給化を図ると共に、離職せる工員、軍人、その他の者の帰農を促進せんとす」、とうたわれている。戦時下の鉱工業部門の壊滅的な状況と逼迫した食糧事情を考えると、離職した工員、軍人、相次いで帰国する引揚者の受入を可能にするのは農業開拓のみ、しかもことは緊急を要していた。

この戦後の農業開拓事業の一環として千葉県遠山村三里塚地区の御料牧場に入植した沖縄県出身者がいた。彼らの中には、戦前、戦中を外地で暮らしていた所謂移民も多く含まれていた。敗戦後やむなく(日本に)帰国したものの帰る故郷(沖縄)を失って三里塚に入植した。この話を人づてに聞いてにわかに興味をひかれた²⁾。これらの人々は、帰国後、本土各地の収容所や知人宅に身を寄せていたが、浄土真宗西本願寺派開教使与世盛智郎(以下人名に敬称略)が中心となり、旧御料牧場の開拓に乗り出した。昭和21年3月16日、下総御料牧場天浪第一地区が解放され、翌22年12月下総開拓農業

協同組合を結成した。幾多の労苦を重ねながらも昭和30年頃には営農もほぼ軌道にのってきたと伝えられる。生活が漸く安定しかけた昭和41年4月、突然新たな難問が文字通りふってわいた。政府による成田新東京国際空港建設の閣議決定がそれである。反対運動も空しく彼らは再び安住の地を追われていくこととなった。

日本の移民は「棄民」と呼ばれ、貧困と結び付けられた否定的なイメージを重ねられることが多い。その移民に「敗戦」、「沖縄」、「三里塚」、「立退き」という4つのキーワードが重ねられれば、尚更その感は強くなる。彼らは「成田(=本土)」でも「移民」であった。彼ら自身も少なくとも空港建設に伴う立退きまでは、地理的にも集住し、自らの文化・価値観を守りつつ、周囲のホスト社会とは隔絶された一種のエスニック集団を形成していた。恐らくはホスト社会の外的な要因(差別)とコミュニティ内部の諸要因の両者によるものであろうが、少なくとも当時の状況に関する資料や証言からはホスト社会への「同化」への指向は見られない。マクロな視点からは、苛酷な運命に翻弄され、ただ流されて生きざるを得なかったように見える人々ではあるが、一方で今回の我々の調査を通して、こうした状況に対し誇りをもって結束するコミュニティの、そしてそのコミュニティを構成する個人の逞しさ、良い意味での強かさが鮮やかに浮かび上がった。

てきた。それはこれまで筆者が永年追いかけてきた「移民」に共通する積極的な戦略でもあった。

1996年1月頃から個人的に予備調査を開始した。1997年度より敬愛大学国際学部環境情報研究所の財政的援助を得て、神田文人元教授、高澤美子教授、高田洋子助教授と筆者の四人の共同研究として立ち上げた(助成は2年間)。これまでに成田など千葉県内で数回、久米島で1回、文献検索と関係者への面接を含む現地調査を行ってきた。予想していた以上に広がりをもつ複雑なテーマで、先行研究も少なく、未だ道遠しの感は強い。本稿が研究途上の一里塚、中間報告に過ぎないことを最初にお断りしておきたい。

2. 「歴史」の空白部

成田地方の歴史においても、沖縄の移民送出の歴史においても、本稿の対象となる人々の存在を見つけることは難しい。そもそも「沖縄」、「成田」自身が未だ日本の歴史の中にきちんと位置づけられているとは言い難い。共に戦後の日本で高度に政治化されてしまったことが、一般の歴史研究者を遠ざけてきたのであろう。千葉大に提出された、聞き取り調査を土台とした意欲的な修士論文の中で福井千緒(成田空港地域共生委員会歴史伝承部会)が「成田の歴史は空港建設の歴史ではない」と指摘している。「成田空港が現在ある場所には、『歴史』があった。空港にばかり目が向いていると思わず見落としてしまう歴史である。そのことを今回の聞き取り調査で、改めて感じた。その歴史を見ずに前へ進んでいいのだろうか。」³⁾ 実際、本稿で扱う人々はこの「成田空港が現在ある場所の『歴史』が見落とされた」現実の中で埋もれていたのである。

そしてこの歴史の空白部を埋めなければ、空港建設の歴史的な意味を真に理解することはできないというのが福井氏の主張かと思われる。

空港建設反対運動の中では、沖縄県人は当初反対派に加わっていたが、かなり早い時期に「脱落」している。「同じ牧場の土地の払い下げを受けたといってもよ、うちなんか本当に苦勞して手に入れたわけだよ。…そういう条件派がたくさんいるから、公団も農民はつぶせると思ったんだよ」⁴⁾、という反対派の農民の条件派批判も運動論の立場からは理解できる。この問題に関して系統立てて調べたことがないのでまとまった議論はできないが、共に国家の政策に苦しみながら、地理的な位置や立場により人々の利害が対立し、必ずしも正確でない情報に拠って互いの対立を深めてしまったことが問題の悲劇性を強めた感がある。

沖縄から来た人たちは(他の人々が配分された平均1町2反よりも)もっと少なかったですね。沖縄の人たちは満州の開拓にかり出されて、それで復員してきて天浪と富里の一部に入ったんですが、終戦直後じゃなくて配分計画が決まった段階で入ってきたということもあって、五、六反歩ぐらいたったかもしれませんね。石井さんて人が中心になって、必死になって共同養豚なんかやっていたんですよ。結局失敗しましたがね⁵⁾。

遅れて入植した沖縄県人がそれ故に与えられた耕地も少なく、経営的にも失敗し、空港建設を機に自ら進んで離職していった、それが反対運動の妨げになった、といったニュアンスで語られる。

他方、筆者が予備調査の段階でお会いした大里富枝(当時成田市立図書館主査)のコメントは今も印象的である。『成田市史』の編纂に関わった経験があり、その経験談の中で、高校の同級生の中に

成田の戦後開拓と沖縄人移民

沖縄の人々がいたこと、その時に彼らに「自由な雰囲気があると思った」と語った。昭和37、8年頃で、開拓地には未だ無灯火の家が見受けられたが、彼らは「あっけらかんとしていた」という。

貧しかったのでしょうか、そんなことは気にしていない、というような…農業が本当にやりたいことでもないから、農作業が終った夕方にはお父さんがヴァイオリンを弾く、なんて話も聞いていました。色々な社会があるな、と思いました。…沖縄の人は高学歴の人が多かったですよ。私の友だちのお父さんも獣医さんでした。成田問題に関しても、沖縄の人は皆あっさりしていましたね。今やっている以外の生活も受け入れる自信があったのではないのでしょうか⁶⁾。

脱落と自信、見方によって正反対の像が浮かび上がる。

「成田の歴史」ばかりではない。彼らは沖縄の移民史の中でも殆ど語られることがない。沖縄は日本有数の移民送出地の一つであり、戦前、戦後の移民史研究の蓄積が大変に厚いところである⁷⁾。ただ、終戦直後に世界各地から戻ってきた県民の消息については殆ど語られておらず、沖縄の海外移住の戦前と戦後の結節点でありながら、あるいはそうであるが故に、短い期間ではあるが「空白」となってきた。『沖縄県史』第7巻各論編6(1974年)は移民にあてられているのだが、この期間については僅かに次のような記載が見られるのみである。

…第二次世界大戦後はわが国の敗戦により、南北アメリカを除く海外移民は、全員が強制的に引揚げを余儀なくさせられた。その数約五万人ともいわれ、台湾からの引揚げ者を含めると、約一〇万人はいたであろうと推定される。(58頁)

本稿でも一部使用したが、昨年末、外務省から戦後引揚に関する史料が公開された⁸⁾。占領軍が行った日本人の外地からの引揚げと在日「外国人」の母国送還、そして日本国内人口の再配置を示す資料の中には沖縄県人に関するものも含まれていて注目される。戦後の占領政策が生み出した歴史の「空白」の存在を示す史料である。今後この資料の収集、分析を急ぎたい。

北米に関しては事情は少々異なるが、戦前の南米や南洋、満蒙への日本の移民・殖民は国策の一部として推進された。外地で営々と築き上げられた彼らの生活の基盤は戦争によりいとも簡単に奪われた。新たに入植した三里塚での空港建設もまた、全く別の形で彼らから生活の場を奪う結果となったわけだが、移民送出→戦争→沖縄→三里塚→立退きと連なる国家の政策に翻弄されつつも、しなやかにそして果敢に自らの生きる場を選び取っていった人々の経験を日本の現代史の中に位置づける試みを今後もささやかに続けていきたいと考えている。未だ全体像を語るに至らない。議論も未熟ではあるが敢えてご叱正を乞いたい。

3. 移民の「戦略」——「沖縄の下総開拓の父」

入植から定着へ

三里塚の沖縄県人の入植から定着への経緯とその戦略について考えて見たい。

まず入植を指導した浄土真宗西本願寺派の開教使与世盛智郎⁹⁾の役割とその背景について追ってみる。

与世盛の甥、上江洲智昭は佐世保で終戦の日を迎え、当時東京の南多摩郡に住んでいた叔父の与

世盛を頼って状況した。叔父が「天皇陛下の土地」である御料地の払い下げ運動をしていると聞いた時の驚きを繰り返して語った¹⁰⁾。

私、何も判らんから、我々、軍国主義の教育ばかり受けておったものだから、「御料地って何ですか」って兄貴に聞いたら、兄貴が「天皇陛下の土地だよ。」私、笑ったんですよ。「天皇陛下の土地、そんな解放できるわけないじゃねえかよ」、って。ということでそんなこと信じもせなかったの。…叔父さんに会ったら、「天皇陛下の土地を持ち続けることができるわけないじゃないか。いずれ解放される。…それがデモクラシーだよ」、と。デモクラシーという言葉も知らなかったんだけどね。その時初めて…。

与世盛はこの頃から海外から引き揚げてくる沖縄県人の落ち着き先を心配していた。「海外から沖縄の連中が引き揚げてきたら何処で収容するんだ、と。どこで受け皿をするかというようなことを話しとったですよ。」¹¹⁾本土在住の沖縄出身の外地引揚者の苦境を見かねてのことと想像される。彼は本土在住者の自助組織として結成された沖縄協会で三里塚にある下総御料牧場解放の噂を聞きつけ、宮内庁に日参して払い下げを求めていたが、御料牧場が宮内庁から千葉県へ移管されたとの連絡を受け、県知事から沖縄県の引揚者に100町歩を払い下げるという約束を取り付けた。100町歩という広さは決まっていますが、どこのどの土地をとという指定もなく、その後、県からの具体的な指示を待つて待機していたが進展はない。ついに1946年3月、20名の先発隊が業を煮やして現地に入植している。知事のお墨付きをもって乗り込んだわけだが、既に彼らにあてがわれるべき土地には他の人々が入り込んでいた。この間の事情を後に沖縄県人と対立することになる「戦災者同盟」側の人物は次のよ

うに説明している。

終戦と同時に天皇の地所はマッカーサーによって凍結されて、御料牧場も国有地になったわけです。しかし国にも県にもまだそんな権力はなかった時代ですから、入植した人たちは、やたら空いている原っぱを開拓していったんです。それで私らが運動に参加してから、いろいろと地割りをして、配分したですよ。実際、苦勞も多かったですがね。資金も食料もなく、裸一貫だというような人たちが、それも農業の経験もないような人たちが戦災者同盟の大半でしたからねえ。鋤やトンビだって、私らの昔の農民組合のツテをたどって、茂原の鉄工所で作ってもらおうというようなことで、御料牧場の実力解放運動をやったですよ。…¹²⁾

沖縄県人が「終戦直後じゃなくて配分計画が決まった段階で入ってきた」と言われた事情が明らかになってくる。占領下、国も県も混乱していたのは事実であろうし、戦災者同盟も沖縄県人も共に日々の生活に追われていてわけで、やむをえない混乱であったと思われる。この状況を打開する為に与世盛はハワイ時代の知人で進駐軍兵士として来日していた二世の助けを借りている。

叔父がハワイが長いものだからね、友だちがいっぱい居るんですよ。進駐軍で。…彼を連れて来て、馬小屋に連れて来てね、(戦災者同盟の)班長…呼んできて、その進駐軍の人が「ここは沖縄の人に与えられた土地だから、あんたがたは出ていかなきゃ。」それで付け加えた言葉がね、「沖縄の人には、マッカーサーから厚生省の人に対して、沖縄の人には衣食住を与えろという指令が出ているんだよ」…¹³⁾

マッカーサー指令が絶対の時代である。与世盛のデモクラシーの議論と、何よりも土地所有者との正式な契約をとりつけるというやり方、更に戦災者同盟の人々が占領していた土地を取り戻すの

成田の戦後開拓と沖縄人移民

に、占領軍で働いていた知人のハワイ出身の二世、更には進駐軍の権力を利用している点が注目される。

ハワイと成田を結ぶ線

入植候補地の選定から入植にいたる与世盛の発想に戦前ハワイに渡航し、直接見聞きしていた現地の開拓地での経験が活かしていることは想像に難くない。1983年に又吉盛清(浦添市史編集室)が調査を行った時、与世盛は既に三里塚を離れており、89歳の高齢ではあったが健在であった。1921年(大正10)、「薬学の視察にハワイに行き、その沖縄人移民が現地にとけこまず、失敗して、社会的に損失をこうむっているのは、「宗教心」がないためだと、啓発されるものがあり、帰国して仏教学校に入学、浄土真宗本願寺派の開教使になって、布教活動に入っている」、と紹介されている¹⁴⁾。ハワイに戻って現地の見学団を連れて日本に戻っている間に日米開戦の日を迎え、上海経由で全員をハワイに送り返した後も自らは上海に残り、敗戦直前に日本に戻っていた。「叔父さんは一応、これだけ落ち着いたから、と自分は農業するんじゃなくて、今度は沖縄へ行ってお寺を建てたんですよ。…だからそういう仕事ばかりした。人の為にして。だから(自分は)金儲けはだめ。…そういうような社会奉仕ばかりして歩いているんですよ」と上江洲の与世盛評にあるように、貧困と混乱の時代にあって奇妙にも思えるほど世俗から遊離したイメージが残されている。

与世盛の行動を理解するヒントになると思われるのが彼の出身階層とハワイでの経験である。

まず彼の出身階層であるが、一般的に戦前から沖縄県人は日本本土よりも海外に移住する傾向が

あった。石川友紀(琉球大学教授)はその理由として次の4点を挙げている。①廃藩置県以来沖縄は本土から支配され差別され続けてきた。本土に移住した場合は差別が継続し、一層酷くなることが想定された。②沖縄が小さな島々で形成された島国で、耕地が少なく、島内で生活していくことに不安があり、一方で四方を海に囲まれていて船で海外に出ることに抵抗感が少なかった。③経済的に困窮して次男、三男が出稼ぎに出るというよりは、長男が積極的に海外に出る傾向があった。④一族の誰かが海外に移住すると、その人物が親戚知人を招き寄せ、他の島民もそのツテを頼って移住するという形で、海外移民が増加した¹⁵⁾。久米島はその沖縄でも比較的経済的に恵まれていたと言われている。上江洲家と縁戚関係にある喜久永正は当時の島の経済状況を次のように語ってくれた。

旅費の関係がありますから。(ある程度経済的に余裕が無ければ)旅費をどうしても工面できなかったと思いますよ。…離島で豊かではなかったと思いますが、余所からはですね、米がとれるのは久米島くらいなものだと言われていますね。まあ、水は豊富でしたし、それと紬、久米島紬というのがありましてですね、久米島は普通は先島上納ですごく苦しんでいるのに、久米島は紬のお陰で、半分は米の上納、というよりは紬の上納が多くてですね、女性がそういうような上納品、税金の大半を稼いでおられる関係上ですね、割と貧乏ながらも先島あたりよりも裕福であったのではなからうかと私は思っているわけです¹⁶⁾。

喜久永は日本政府と当時の檜原知事の政策に対する反発についても指摘している。

中央政府に対しての反発でもありますよ。思想的な。日本語がうまく使えないとか、色々なコンプレックスを持つ

ていますからですね、反発ですよ。中央政府に対する。そして当時の楢原知事なんかに対する反発。当時の思想家がそのようにしてやっていますからね。それに共鳴してですね、沖縄民が出て行ったのは、それに対する反発があったと私は思います。ハワイとか南洋にしる、沖縄人がよけい出て行っていますが、何もここに馬鹿にされるんだったら、向こうにというような。

このような状況下にあった久米島からの海外移民は、村内で社会的・経済的地位の高い家の出身であったとする論考がある。昭和59年に発表された西川大二郎による「久米島の海外出移民の社会経済的特性」（法政大学百周年記念久米島調査委員会編『沖縄久米島の総合的研究』）によれば、具志川村出身の明治、大正初期の移民、特にハワイへの第一回移民の上江洲智基、智林、ブラジル第一回移民の上江洲智健らは、山里殿内にもつながる旧家の出身であり、村内における社会的、経済的地位のみならず、新しい状況を切り開き、その情報を村内にもたらしたことで、しばしば「先覚者」という尊称に近い呼称で呼ばれていた。三里塚に関係した与世盛、上江洲らもこの家につながる人々である¹⁷⁾。与世盛が又吉の調査の際、「移民」ではなく「薬学の視察」のための渡布としたのも、現地で差別されている「沖縄人移民」と自ら一線を画し、その啓発の必要を説いているのも、その出身階層を背景としたものと思われる¹⁸⁾。

コミュニティ建設案

与世盛の具体的なコミュニティ案にはハワイでの経験が活かしている。1983年10月14日付『沖縄タイムス』に掲載された「戦後沖縄人開拓村」と題する記事で、又吉盛清が与世盛らによって宮内庁に提出された開拓村設立の願書とこれに添付された趣意

書、具体的な営農計画と三里塚農村設置案に記載された開拓計画の内容を紹介している¹⁹⁾。即ち、沖縄県出身者のための「相互扶助による理想的な有畜農家を、沖縄人本来の純朴なる美風をいかして平和的な農村を建設」することを目的とし、「水稻、大麦、甘藷、ジャガ芋などの生産から製粉、醸造、でんぷん、豆腐、みその農産加工用、家畜飼料に至るまで明記し、一戸当たりの作付面積はさしあたり、二十五戸分、七十五町歩(二百二十五万坪)が要る」と記している。デンマーク式多角経営を採り入れ、農家の比率を90%、技術者と教育家を10%程度とし、中央部、購買消費組合を組織する他、学校、図書館、寺院、教会、公会堂などの文化施設や、沖縄の祖国復帰の拠点としての人的交流、研究活動のための共同宿泊所、病院、孤児院、養老印、託児所、理髪所、浴場などの厚生施設、体育、映画、演劇場などの娯楽施設や共同墓地の建設も組み込まれているという。

上江洲の回顧談からその実践の状況を追って見よう²⁰⁾。事情はともあれ、他に遅れて入植することになった沖縄県人は当初、20名で18町歩の土地を耕作することから開拓を開始した。その後、徐々に、飛び地になった原野が払い下げられていった。最初に天浪第一、継いで第三、長原、大清水と「ちびりちびり払い下げてくれ」、その度に主として親戚を頼って何十世帯かが入植することとなった。

何回も変わっているんですよ、土地はね。出て行った人もいるし。その後で他の人が…。叔父の考えは、どうせこっちへ来た以上は村作りをしようじゃないか、ということで、それで学校の先生が多かったんですよ。それでお医者さんが一人…獣医さん、そして産婆さん、これ全部そろえていたんですよ。…

成田の戦後開拓と沖縄人移民

実際に農民ばかりでなく、教師、医者、獣医、産婆、自前で自己完結型のコミュニティ作りが行われた。現在の三里塚の墓地も、実際に沖縄県人の土地に造成されたものであった。

あの墓地はうちの組合で造ったものですよ。…あの頃、我々まだ若くてね。まだ所帯(をもっていない)独り者の頃だから墓地のことなんかあまり考えなかったんですよ。でも叔父と、もう独りの従兄弟、坊さんの資格を持っている人がいたの。「墓地無けりゃしようがないじゃないか、うちの開墾地を墓地にしようではないか、と。でまあ、地元の声をかけたんですよ。一緒にやろうじゃないか、土地はこっちで、ということで。それが元で、今の三里塚の墓地はできた物ですよ。

沖縄の伝統的な亀甲墓や、与世盛らの年齢から来る発想とは言え、自分たちの土地を提供し墓地を造成する。定着を目指したコミュニティ計画が実践されたと考えてよいであろう。

本土と沖縄県人：ホスト社会の現実

終戦直後の日本本土には約25万人の沖縄県人が居住しておりGHQが希望者の沖縄への送還を行っている。注目すべきはこの送還計画に関しGHQが琉球人を「非日本人」と位置付けている点である²¹⁾。昭和23年12月28日現在で既に15万9千名の送還を終え、この日、翌24年3月15日にこの送還計画の打ち切りを発表している²²⁾。そもそも過剰人口を抱えたが故に移住が行われたのであり、戦災後の沖縄への受入には限界があった。終戦直前に九州などに強制疎開させられていて酷い生活をしている者の送還は続けるが、残る大部分は内地居住を希望している模様、と報告している。送還打ち切りは「沖縄諸島の将来の帰属や沖縄人の将来のステータ

スの問題とは無関係」であり日本政府として「政治的な措置を講ずる必要はない」としているが将来沖縄が正式に日本から切り離された場合、1949年3月15日以前に送還された者は「一應日本国籍保持の希望を有しないものとして扱われる等の効果が生ずる余地はある。この点はなおGHQの意見を聞く必要がある」としている。当時、始めていた「日本人」でありながら「非日本人」として扱われた沖縄人には恐らくはそのステータスについても、一旦沖縄に戻った場合日本への再渡来が禁じられていたことも知らされていなかった。

経済的な困窮の中で、内地も疎開者や引揚者を受け入れる余裕をなくしていた。昭和20年11月外務省九州地方事務局長より東京の終戦事務局総裁に宛て「引揚沖縄縣人九州ノミニテ既ニ二、五〇〇〇名以上ニ達シ受入態勢充分ナラズ視聽者一〇〇ヲ超エナホ激増ス」²³⁾との報告がなされている。同じ頃、日本各地で沖縄県人関連の事件が多発していた。戦争中に沖縄人の中にスパイがいたというデマが広がり、日本各地で沖縄人疎開者、引揚者、復員軍人に対する迫害が続いていた。その自衛手段として1945年東京に伊波普猷を代表に沖縄人連盟が組織された²⁴⁾。与世盛氏が三里塚御料牧場への県人の入植にこだわったのもこのような状況を背景としたものと思われる。

三里塚における差別の一端を知る証言もあった。

一頃はもう沖縄を特別視してましたね。まあ、沖縄開拓がどっと入ってきて急に学級増になって、校舎新築の陳情なんかね…、それでやってけるかどうかという一つの、ずっといる人たちの危惧ですね。心配。もう一つは「沖縄の女の人と結婚する相手がいるだろうか、っていう、いわゆる差別。蔑視してたんですね。「好き好んで沖縄の人とは一緒になんめえ」なんてね。実際はそういうカップルも誕生し

ているんですよね。だけど当初は特別な目でみていましたよ。そして上江洲さんが言っているように、「沖縄は共産党だ」なんてね、やたら(土地を)乗っ取るようなことしとるから…。それと三里塚の演芸会みたいなものがあるんですよ。そうすると沖縄の人が独占しちゃうんですよ。それで空手の型をやったり、沖縄舞踊でしょう。芭蕉布なんかを着て踊ると特別な目でみていたの²⁵⁾。

土地をめぐる争い、後述するが貧しい中で子弟の教育に力を注ぐ親たち、優秀な子供たち、異文化を抱える人々への蔑視、差別、その差別ゆえに孤立性と団結を強め、沖縄の文化に執着する人々の姿がある。そして文化的な差異が目立つ集団の存在が更なる差別へとつながる。移民のエスニック集団を支える力学がここでも機能している。

教育の役割

三里塚に入植した沖縄県出身者の中に教員が多く含まれていたことは既に述べた。入植地での生活は厳しかったが、沖縄出身者は苦しい開拓生活にも拘らず、子弟の教育に特に全力を注いだ。山里昌英らが『千葉県戦後開拓史』に寄せた「下総開拓の歩み」は「昭和47年5月現在、入植以来の延入植戸数36戸で、公私立大学卒業生31名、在学者7名、高校卒業生48名」と報告している²⁶⁾。妻が沖縄出身である新島新吾は昭和24年にこの地で教職についている²⁷⁾。

新島：沖縄の方々の子供さんが大勢来てたわけですよ。それこそ皆、オガミから、「行って参ります」と来る連中ですね。それはそれはもう…、蚤虱なんていうのは当たり前ですね。

上江洲：あの頃の子供たちは皆、成績良かったみたいだね。

新島：沖縄の人は教育に熱心だったね。

上江洲：…最初天浪に入った時に、この辺の人に、食う物はろくなの食っていないで沖縄の連中は皆、高校を出すから「俺らの子供っちは百姓だから、そんなのさせっこねえ」っていう言い方だったんだもん。旧村の場合には、百章の跡取は高校なんか出しっこない、というような言い方だった。ところが沖縄の連中は金無くても出すものだから、次第次第に刺激されたんだろう、「あちらが金出せるのにこちらが出せないわけないだろう」って。で、皆(高校に)行くようになった。

教育による次世代の社会的上昇に期待した点は戦後日本に一般的な傾向である。だが終戦直後の飢餓の時代を考えると沖縄県人の教育重視の傾向はやはり顕著である。山里昌英が三里塚開拓のバランスシートを「私の開拓史」として残している²⁸⁾。戦中も東京で教員をしていた氏は昭和22年1月、叔父である与世盛に誘われて、三里塚に入植している。当初、本人は教職に就き、開拓は専ら妻に任されていた。

昭和23年 県開拓課の融資で、肉牛3頭、乳牛1頭配分。乳牛は希望者が無く、県へ返還することになったので、引き取って飼育…やがて成牛に育ち、出産期を迎えた。…学校の勤めもあるし、家内も畑と搾乳は無理なので、出産と搾乳は専業酪農家に預けました。乳量2斗余の優良牛…其の頃学資に追われていたので、間もなく売却…未だに惜しい気持…

昭和31年 教職を去る…本格的な開拓生活…当時子供達は大学1人、高校2人、中学2人、小学2人で、教育費の大量に要る時期…月給は皆無…半年或いは一年を要する農業収入では到底間に合わなかった

昭和33~35年

大学3人、高校2人、中学1人…学資金は育英資金と恩給、それに各自のアルバイト…日常生活は麦、落花生の収入期を目当てに、前借後払いで借金の連続。

退職金の一部15万円で乳牛2頭を買い、酪農を始める。

成田の戦後開拓と沖縄人移民

二頭共妊娠中であつたが、搾乳量少なく、採算が取れなかつた。…

優良牛を小牛から飼育し、半ば成功して酪農は8年間…毎朝5時起きで搾乳し、骨身を削るような苦勞…乳牛一頭平均5000円の収入…今にして思えば良くも8年間やり続けたと感慨に耽ると同時に身震いする思い…

養豚、養鶏も試みたが、規模が小さく、其の上一つの失敗に出会うと直ちに挫けてしまい…

麦、落花生を主要作物とし、西瓜、メロン、キャベツ、カボチャ、白菜、トウモロコシ等、手を替え品を替え作り続けたが、相場の落差が大きく、勞多く、利少なかつた…昭和32年 学資の一助…桑を植え、養蚕…初年度は良いまゆを取つたが、収量が少なかつた。二年目は成績不良の上、相場が暴落し惨め…三年目の桑の最盛期に入り、桑を抜根し、養蚕を休めた。

昭和36年 生姜のハウス栽培…加温過剰で失敗…

素人農業は失敗の連続である。経済的な困難もさることながら、その中での子供たちの教育に対する情熱は圧巻である。昭和41年4月の国際空港建設による立退きで、彼の開拓時代は終わりを告げる。バランスシートは次のように総括される。

止むなく、先途の生活の見通しもないままに全財産を新国際空港公団に譲渡…代替地を富里村は山に選んで転住…思えば25年前、終戦によって故郷沖縄を失ない、第二の故郷とすべく、三里塚に入植…運命の皮肉は何処まで非情なのか、今再び安住の地を求めて移転しなければならないとは断腸の思い…

私にとって開拓生活の収支決算は…耕地は三分の一に縮小…土地の価値は高くなつたとはいえ、夢を託するほどの安定性がない。…今までの開拓財産は、それを抵当物件として、銀行から金を借りて、学資の一部とし、子供7人の教育が出来たことは、開拓入植したお陰…

筆者は戦前アメリカに移住した移民一世、二世

に対する面接調査を行つてきた。彼らも苦しい生活の中で子供の教育に力を注いできた。しかも専門職に就くことを目指した。「どんなことがあつても身につけた教育は奪えないから」という言葉が頻繁に聞かれる。多くの物を失つた人々ならでの言葉であるが、同時に未来に向けた前向きな言葉でもある。同じ言葉が三里塚の調査でも聞かれた。

教育は期せずして子供たちが開拓地かられるツールとなつた。山里の次女が語る²⁹⁾。「ここは、やっぱり、余所者で、出て行くところというのは子供なりにあつたよね。(長女から「執着しない」という合の手)それはありましたよね。私たちの中に…ええ、いずれ出て行くからって。」空港建設の際、沖縄県人が結局は諦めることになつた事情は次のように説明された。

(反対運動に熱心だつたのは)この周辺で跡が継げない人たち。昔は農業を跡げない人たちが入つてきてるから、非常の農業が上手だし、愛着があるし、そういう人たちが頑張つたんです。私たちは皆、素人農業で、かなりあの頃、営農資金をもらつてうまく行かなくて借金を抱えてたから、この際、整理しちゃつて、つていう…。替地で。

4. まとめにかえて

移民(本土を含む)から敗戦、沖縄、成田へと連なる歴史は民衆にとってはあまりに苛酷な歴史であつた。そこには常に貧困、厳しい労働、経済的対立、差別といった問題がつきまとう。だが民衆がその歴史的現実の中で只に流されて生きてわけではない。戦前の移住地での経験は与世盛という稀有な人物を通じて成田の戦後開拓に活かされ、ある意味で「成田」を乗り越えるにも使われた。経

験は次の苦境に立ち向かう「戦略」として用いられたのである。

三里塚の沖縄県人入植者の知性と精神性をよく表しているものとして筆者が感銘を受けたのが、彼らが空港建設の為にこの地を立ち退いた際に全戸に配布されたアルバムである。

新島新吾の父新島盛喜が発案し、その指示に従って新島新吾自身が写真を撮ってまわったという。昭和41年3月の入植20周年記念事業として企画され、仕上げまでに2年の歳月を費やしている。アルバムの裏表紙の「アルバム作業を終わって」と題する盛喜の記録によると、42年4月1日の第1回委員会でその方針が決められている。①家族写真——出来るだけ全家族をいれること、②入植以来20年の生活の根拠となった住宅をいれること、③各自農業経営の特徴をいれること、④三里塚付近の景色及び組合行事のスナップを入れること当時は。記念撮影であれば正装した姿を納めることが一般的ではなかったか。結果として、文化人類学の調査のような、生活感をしっかりと捉えた写真集が残された。

二十周年記念事業はそのまま入植地との別れのための事業となった。「…時あたかも空港問題も静まり、条件賛成の声も聞かれ、空港が竣工されれば組合員の約半数は此の地を離れることになるので、改めて此の仕事の意義の深いのを悟り、45年中には官製せねばならぬと思った」とも書かれており、空港解説と立退きが既に冷静に受け止められている様子が窺える。

…終戦後裸一貫で入植して働いてきたお互いの足跡が刻み込んでくれた因縁深い、この大地が急激な時代の波と共に変貌することになりましたが、幸いこのアルバムには盛沢山の思い出が永久に保存されています。どうぞ、時には其の扉を開いて、ありし日を偲び明日への希望に向って遅し

く進んで行きたいと願います。

特記本調査に関しては、本文中に見る通り新島新吾氏、上江洲智昭氏、上江洲智泰氏、上江洲智隆氏、喜久永正氏、山里たけ氏、吉岡みな子氏ら多くの方からお話をうかがった。心から謝意を表したい。お二人は既に鬼籍に入られた。貴重な御経験の一端でもうかがうことができたことを幸せに感じている。

尚、本共同研究については、敬愛大学環境情報研究所『環境情報研究』第6号(1998年4月)、第7号(1999年4月)、第8号(2000年4月)に各年度の活動報告と、次の2本の論考が発表されている。

- (1) 高田洋子「千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究：房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から(1)」『環境情報研究』第8号(2000年4月)、5～14頁。
- (2) 神田文人・高澤美子「戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島」同上、15～36頁。

(2001年4月19日脱稿)

成田の戦後開拓と沖縄人移民

注

- 1 当初の開墾予定面積は全国で155万町歩（内地85万町歩、北海道70万町歩）、5ヵ年計画であったが、第二次農地改革により昭和22年10月24日に閣議決定された開拓事業実施要領により整理されることとなった。千葉県は旧軍用地の内、開墾可能面積を4,219町歩と見積もり、農地開拓委託事業を実施した。三里塚御料牧場は財産税の物納により925町歩が解放され、同じく緊急開拓事業の実施地区となっていた。栗原東洋編『千葉県農地制度史』農地委員会千葉協議会（1950年）下巻204-206頁。
- 2 木村健二氏（下関市立大学）にご教示いただいた。謝意を表したい。
- 3 福井千緒「戦後開拓と離農：三里塚御料牧場周辺地区のケーススタディー」（1998年）43頁。
- 4 三里塚柴山連合空港反対同盟『大地をうてば響きあり』社会評論社（1984年）79頁。
- 5 前掲書、76-77頁。
- 6 1996年1月13日、大里富枝氏に面接。成田市立図書館にて。面接者：筆者
- 7 県史、市町村史のレベルでも他県に比べて格段に多くの紙幅が移民史に割かれている。
- 8 Finding Aidあり。外務大臣官房総務課外交史料館『外交記録マイクロフィルム検索簿 第16回公開』
- 9 久米島の大岳小学校発行の『大岳百年の人物』（1986年）に与世盛氏の娘婿上江仁憲氏が寄せた一文により判明した略歴は次の通り。1894年5月1日生まれ。具志川尋常高等小学校卒業後状況、東京薬学校卒業。1921年薬学視察のため渡布しハワイ島ヒロ市の義兄上江洲智倫経営の病院に勤務。1924年に帰国。今日と西本願寺立中央仏教学院に学ぶ。1927年ハワイ島ヒロ本願寺に開教使として勤務。1938年ホノルル市に慈光園を創設。
- 10 1997年11月29日。上江洲智昭氏と第1回面接。於三里塚御料牧場記念館事務室。面接者、神田、高澤、村川。新島新吾氏（成田市教育委員会社会教育指導員）、木川正氏（成田市教育委員会社会教育課）が同席。
- 11 同上。
- 12 『大地をうてば響きあり』、74-75頁。
- 13 上記上江洲氏面接。
- 14 又吉盛清「探訪：戦後沖縄人開拓村（3）」『沖縄タイムス』（1983年10月13日）
- 15 1998年12月22日。神田文人氏の石川氏との面接メモより。神田・高澤「戦後の三里塚牧場の開拓と沖縄・久米島」『環境情報研究』第8号（2000年4月）、29頁。
- 16 1998年12月23日、久米島の上江洲本家で神田、高澤、村川の三名が面接。
- 17 久米島の上江洲本家は国指定の史跡となっている。
- 18 又吉盛清「探訪：戦後沖縄人開拓村（4）」『沖縄タイムス』（1983年10月14日）
- 19 前掲。
- 20 1997年11月29日。上江洲氏との第1回面接。
- 21 昭和21年5月7日付日本政府宛指令「引き揚げに関する改定覚書の伝達」附属第三章及9月10日付「引揚」附属第一章）外務省外交史料館所蔵「太平洋戦争終結による沖縄人の保護引揚関係」（K'7-1-0-28）『太平洋戦争終結による内外人の保護引揚[本邦人]』
- 22 昭和23年12月28日付外務省総総「沖縄人送還計画打切発表に関する件」と題する省内回覧用手書き覚書。同上綴内。
- 23 昭和20年11月16日付で九州地方行政事務局長より東京終戦事務局総裁宛「沖縄人の至急帰還方ニ関スル件」同上綴
- 24 又吉盛清（当時浦添市史編集室）「探訪：戦後沖縄人開拓村（1）」『沖縄タイムス』（1983年10月11日）
- 25 1998年1月29日、新島新吾氏と面接。三里塚御料牧場記念館にて。面接者：神田、高田、村川。
- 26 山里昌英、島寛、新城寛政、上江洲智宰、東門口俊英、東門口武八「下総開拓の歩み」千葉県戦後開拓史編集委員会『千葉県戦後開拓史』、千葉県、昭和49年4月。
- 27 1998年1月29日、新島氏面接。
- 28 山里昌英「私の開拓史」前掲書。98-99頁。
- 29 1998年10月24日、吉岡みな子氏と面接。富里村吉岡宅。面接者：神田、高田、村川。

ABSTRACT

Postwar Reclamation of Sanrizuka, Narita by "Immigrants" from Kumejima, Okinawa

Yoko MURAKAWA

This is a part of the cooperative study entitled "Empirical Research on the Social and Cultural Characteristics of the Surrounding Area of Sanrizuka, Narita in Chiba Prefecture. Paying attention to the fact that there were some settlers, who were originally from Kumejima, Okinawa, had immigrated and had been repatriated from abroad after defeat of Japan, the present writer traces their "postwar history"--how they reestablished their lives in Sanrizuka, keeping the social and cultural ties and solidarity in the Okinawan community, and how they coped with the eviction problem from the airport site. Their stories provide a fresh perspective for looking at historical and contemporary significances both "Okinawa" and "Narita" in the postwar history of Japan.